

アナーキスト

2005(平成17)年7月13日鑑賞(ホクテンザ1)



監督＝ユ・ヨンシク／脚本＝パク・チャヌク／出演＝キム・イングオン／チャン・ドンゴン／キム・サンジュン／チョン・ジュノ／イ・ボムス／イエ・ジウオン（エスピーオー配給／2000年韓国映画／104分）

……この映画は、抗日テロ組織に属していた5人の韓国人「アナーキスト」たちの活躍と哀しみを描いた珍しいもの。舞台は1924年の上海。上海の租界に臨時政府が樹立された1919年以降、「義烈団」と名乗るアナーキストの組織があったのは歴史上の事実とのこと。テロが実行され、仲間が次々と死んでいく中、ただ1人生き残ったサングが語る回想には実にさまざまな思いが……？

アナーキストとは？

日本では今でも、アナーキズムとは無政府主義のこと、そしてアナーキストとは無政府主義者のことだと一応わかるはずだが、この理解に大きく寄与しているのが、「無政府主義者」大杉栄という人物の存在。

1923年の関東大震災の際、そのどさくさにまぎれて多くの朝鮮人たちが殺されたが、同時に無政府主義者の大杉栄が伊藤野枝らとともに憲兵の甘粕正彦大尉らによって連行され、虐殺されたことは歴史上有名なお話。

これによって、日本ではその後アナーキストは事実上消滅(?)し、その後の無産者運動・社会主義運動は、1922年に創設された日本共産党が主力(?)として活動することに……。もちろん非合法で弾圧を伴うものだったが……。

このように1917年2月のロシア革命が成功する以前は、ロシアではメンシェビキとボルシェビキという2大勢力とともに、アナーキズムは1つの有力な思想であり政治勢力だった。そしてそれは中国でも……？

そんな流れの中、1919年上海に臨時政府が樹立された時、上海の租界にアナーキストの集団である上海義烈団が組織されたのも歴史上の必然……？

この映画の主人公は？

この映画は主人公サング（キム・インゴン）の回想シーンから始まる。舞台は1924年の上海の租界。日本軍に家族を殺された朝鮮人の青年サングは、日本人居住区に放火したが、逮捕されて処刑されることに……。見せしめのためこの処刑は公開されたが、その日本軍の判断は甘かった……？

処刑の寸前、群衆が集まる中でアナーキストたちの組織による「死刑囚奪還作戦」によって数個の爆弾が爆発し、その混乱に乗じてサングらは救出されることに。これに感激したサングは、アナーキストの組織である上海義烈団への加入を決意したが……。

4人は筋金入りのアナーキスト！

サングらを奪還した義烈団の中でも、ニヒルなセルゲイ（チャン・ドンゴン）、朝鮮王家の末裔イ・グン（チョン・ジュノ）、血の気の多いトルソク（イ・ボムス）、リーダー格のハン（キム・サンジュン）はそれぞれ筋金入りのアナーキスト。もっとも、セルゲイは日本軍に捕らえられた時の拷問の後遺症の苦しみのため、阿片から逃げられない身体になっていたから、今は若干戦力としては不足……？

しかし、日本人との混血である恋人のかね子（イエ・ジウォン）は今でも一途にセルゲイを慕い、2人での生活を夢見ていた。自分の先が短いと悟っているセルゲイは、かね子の将来をイ・グンに頼み、イ・グンもそれを承知していたが、かね子はセルゲイ一筋……？

この4人はそれぞれ一流のアナーキストとして、その任務である日本軍へのテロ行為を実行するべく十分訓練を受けていたから、サングがこの4人に憧れたのも当然。そして、まだひよっ子のようなサングをこの4人はかわいがり、アナーキストとしての一からの訓練をほどこしていった……。

コトの前には必ず写真を……。

今でこそ写真をとるのは日常茶飯事の光景だが、1924年当時は、写真をとるのは何かの記念の時だけ。

もっとも、そのもっと前は、一生に1度の記念として写真をとっていたことは、誰でもよく知っている坂本竜馬の写真や徳川最後の将軍となった15代将軍徳川慶喜の写真を見れば、よくわかるはず。この4人プラス1名のアナーキストたちは、コトの前には必ず仲間の写真をとっていたが、これはいつ命を失ってもよいという覚悟の証し。

もっとも、非合法組織として闇から闇に生きていくべきアナーキストの組織としては、顔写真が官憲の手に渡れば決定的にヤバイはずだが……。

この写真館のおやじを手伝うのは中国人の若い娘リンリンだが、いつの間にかサングはこのリンリンといい仲に……？ しかし写真館のおやじは、当局の手入れによって逮捕され、ついにこの写真館も閉鎖させられることに……。

アナーキストは腕だけでなく、服装も大切……？

4人のアナーキストは射撃、ナイフなどの腕は一流で、アジトの中でサングは連日その特訓を……。

しかし一流のアナーキストに必要なのは射撃やナイフなどの腕だけではなく、マナーや服装も大切。なぜなら、アナーキストの行動の場は必ずしも「闇の世界」ばかりではなく、華々しいパーティー会場の場合もありうるから。さらに暗殺のターゲットをよく観察しておくためには、そういう公式の場でその人物をよく記憶に留めておく必要がある。

そんなわけで、この4人のアナーキストは腕も一流なら、マナーも服装のセンスも一流。もっともトルソクは少し血の気が多いためか、いくらパリッとした服装をしても、パチッとときまっていない(?)が、超ハンサムなセルゲイやイ・グンは一流紳士で十分通用するし、ハンも十分合格。前半は、4人のアナーキストたちのこんな魅力も随所に登場するから、要注目……？

ストーリーはやや複雑……？

セルゲイがなぜ拷問を受けたのか？ セルゲイとかね子はなぜ相思相愛の仲なのか？ かね子は何をして生きているのか？ この4人のアナキストはどうして結びついているのか？…… etc. この映画のストーリーはわりとわかりにくいことが多い。またサングが仲間に加わった後のセルゲイによるロシア人へのテロは、持ち逃げされた組織の活動資金を取り戻すためらしいのだが、その辺りがもうひとつわかりにくい……？ さらにセルゲイはその取り戻した金の半分をなぜ……？ その結果セルゲイは遂に……？ さらにセルゲイを慕っていたかね子は……？ このように話はチトややこしい……。

最後の大仕事は……？

いつまでもアナキストたちに好きに活動させておくほど、日本軍も甘くはない。アナキストに対する取り締りや弾圧強化のため、義烈団の犠牲が大きくなるとともに、組織にも内部対立が生まれて、分裂状態に。

セルゲイ亡き後のサングを加えた4人のアナキストたちは、今は某地にひそんで細々と次の任務を待っていた。この時、既にリーダー格のハンは肺病を病んでいたうえ、血の気の多いトルソクなどは活動の場を求めためかっぱらいもどきの活動を提案する始末。このように上海でのアナキストたちの活動は行き詰まっていた。

そんな時彼らに舞い込んできた最後の大仕事は、大きな客船に紛れ込んで、日本陸軍の幹部と高級官僚たちを一気にやっつけること。そして、この仕事を最後に4人は朝鮮に戻る希望も……。

最後の生命をかけた大仕事を明日に控えて4人は……？

トルソクの悲劇とサングの大失敗！

集合時間は明日の朝8時。どんなことがあっても10分以上は待たないというのが約束。一足早くその集合場所で待っていたトルソクは、今までの荒っぽい活動がたまたったかのように、官憲に発見されて……？

他方、サングが最後の夜を過ごしたのは、写真館の娘リンリン。リンリンとの2人の夜に安心して、ぐっすりと寝込んだサングをみて、リンリンはサングの時計と家の柱時計の針にひと細工……。そのため、1度目を覚まして時計を見たサングだったが、まだ時間があると安心してもう一眠り……。しかしてホントに目を覚まし、太陽の明るさにビックリして外に飛び出してみると……。もちろんこれは、リンリンの愛情の表われなのだが、こんな形で示される女の愛情はアナキストには大きな迷惑……？

アナキストたちの哀しい結末は……？

最後の大作に4人で臨むはずだったが、トルソクとサングのとんだハプニング(?)のおかげで、決行するのはイ・グンとハンの2人だけ。さらにこの時ハンの病状は悪化し、血を吐いて倒れ込んでしまうような状態となっていた。そんな中、まずイ・グンがピストルを構えて1人で果敢に立ち向かって行ったが……。そしてこれを途中から援護したハンも……？

既に客船に乗り込む前に、官憲の手によって射殺されたトルソクとともに裸にされた3人の死体は見せしめのために、「不良鮮人」と書かれたむしろに覆われて、雨ざらしの状態に……。

「俺は大きな仕事をやって歴史に名を残す人物になるんだ！」と豪語していたトルソクだったが、その末路はあまりにもみじめなもの。さらにアナキストたちの知恵袋として活躍していたハンも、王家の末裔の血筋のイ・グンも……。アナキストたちの末路はいかにも哀しいものとなってしまった。

サングの回想はこんなところで終わるが、4人の先輩アナキストたちを失ったサングは、その後どのような人生を歩んだのだろうか……？

2005(平成17)年7月14日記